

アイシャに訪れた危機



と救世主(スライム)

「ふん、それはアイシャが悪かったんじゃない?。」

「ん、やっぱしそう思う?。」

ここはアダマンティウス・リベラティオ敷地内にある
総合研究施設

「ヴァルプレオス」

この施設はマーゴハンター専門病院や研究施設、
アニメウェポンやサブアニメの開発、製造
すを行える工房が併設されている
大規模施設である。

今日はマーゴ、クリステッラにレントを人質に取られ、
彼女を救出した3週間後。

アイシャが今いるのはヴァルプレオス内の
研究処置室前のロビー、
そこで世間話をしているのは以前様々な経緯で特区入りし
仲良くなったスライムの少女、リィムである。

「それで謝られたレントは喜んでたの?。」

「いや、凄い悲しい顔された、多分あれ怒ってたよなあ……。」

「今のボクでもなんとなく分かるけど、例えばボクの失敗を先生に謝られたらなんで? って思うし、多分なんか嫌だよ。」

「そつかあ……そうだよ、悪いことしちゃったな。」

今2人が話しているのはレントが目覚めた時にアイシヤが巻き込んだ事を謝罪してしまった件についてである。

「でもじゃあなんて言ったら良かったのかなあ。」

「さあ?、そんなの分かんない。」

「そんな、ハシゴ外しなよう。」

宙ぶらりんな気持ちのまま突き放された事に口を尖らすもスライムの友人は特に気にすることなく目の前の端末の画面とにらめっこの最中だ。

「ボクより長く人間やってるんだから自分で考えてよ、ボクは人間の事はまだ勉強中なの。」

「もう、で、どんな感じ?。」

「うん、ボクこれ作ったヤツ超嫌い、性格悪すぎる。」

それは件の人質事件直後の事である。

救出部隊の中に偶然近くに居合わせアイシヤ達の危機を知った彼女達の主治医が同行する事になったのだが、主治医は運び出されたアイシヤの状態を診てある異常に気付き処置を行った。

その後の精密検査でアイシヤがマーゴの十字礫より受けた電撃、あれ自体に特殊な術が混入されており、それが今もアイシヤの体中の神経に絡んだままなのだという。

「時間差で起動するとか、マーゴハンター狙いすぎてホントいや。」

更に調べるとその電撃には浴びせられた者がエネルギーを使う事で術が発動する。時限式の罠が仕込まれていた。

「でも良かったのは脳みそとかに
いつてなかった所かな。」

「：大方人質を殺す時に意識を失わせないように、
とかそういう理由なんだろうけど。」

データを眺めながら独り言ちるリィムだが、
あ、あれ聞かなきゃ。
と何かを思い出しアイシヤにある事を聞いたです。

「所でその腕輪、外してないよね？」

「もちろん、先生の言った事は守りますとも、今回はちよつと洒落になつてないしね…。」

アイシャは装着された腕輪を眺める。

この腕輪はマーゴハンターの力、特にエネルギーの類を一切使えないようにする効果のある腕輪である。

アイシャの状態から推測した主治医が緊急時の特例として使用したのだ。

「で、付け心地はどう？、不便な事は無い？」

「うーんとね、ドアの角に小指ぶつけた、痛すぎた、人間慣れつて怖いなと思いました。」

エネルギーの使用全てを封じるという事は普段無意識下でも貼っているバリアさえも使えない、という事である。

だがもしも術が発動していたら淫気の根はアイシャの神経をズタズタに引き裂き、そのままの状態で融合してしまうだろうという事だった。

その際に襲い来るであろう激痛は想像を絶するものになるだろうし、更に融合時、痛みをそのままにするだろうと予測され、そんな状態に晒されればたとえマーゴハンターと言えど良くて再起不能、悪くて…、という分析で、それを聞いたアイシャも流石に背筋に寒いものが走ったという。

「後、あの人達が仲良くしてくれない。」

と、窓際に立つ男性に手を振るアイシャ、しかし男は微動だにしない。

彼はアダマンティウス・リベラティオの言うなれば
隠密部隊に所属する1人で
今回の腕輪の監視任務を行っている。

「昔の話聞くと、あるんだろうなあって思ってたけど
想像以上にヤバイんだろうねこの腕輪。」

その昔アダマンティウス・リベラティオと
マーゴハンターが激しく争った時代があるという。
それはアイシャの師匠が新人だった頃くらいの
時代の話なので、

アイシャ自身話に聞いただけで現実味は無かったのだが、
こういう物があると知ると
嫌が負うにもそういう事があったのだと実感してしまう。

その扱いは超嚴重で、
この3週間アイシャの行動の殆どに
彼らの監視と護衛が付いている。

「よし、じゃあ始められるね。」

「…ねえ、その難しそうな分かるの?。」

「そりゃあ分かるよ。」

リイムは特区入りした後、
配達業に勤んでいたのだが、

ヴァルブレオスへの配達の際に
施設内の様々なものに好奇心を刺激され
度々職員を質問攻めにする事があったという。
その中でアイシヤの主治医と出会い意気投合、
特に勉強する楽しさに目覚めたらしく
配達業の傍らここに来ては主治医の手伝いや
勉強を教えてもらっているという。

「ふくん、そつか、じゃあ今日はリイムが先生だ。」

「うん、そうなるかな。」

「じゃああその部屋で
あられもない姿になつてくれるかな?。」

「……………ん?。」

「これも久々な気がするね…。」

リイムの姿が人の姿からスライム特有の半透明なゼリー状の姿になると、下半身が溶け広がりその一部が全裸のアイシヤの体に纏わりつき、極薄のスライムラバーに変化する。

「……。」

「ん？、どうした？」

首から下をリイムのスライムラバーに包まれたアイシヤの胸のタロスがリイムが突然撫で始める。

「これ、大丈夫かなって…。」

「…、一体いつの話してんのよ、とっくの昔に治ってるよ。」

「色々分かってくると、あの時酷い事しちゃったんだな、と思っさ…。」

特区入りした時、リイムは人間の事があまり分かっていなかった。でも特区で暮らすようになり様々な人と関わり色々理解していく中で、一歩間違えたらアイシヤを殺していたかもしれないあの時の事を最近になってとても悪い事をしてしまったと分かるようになったのだという。

「今日は頑張るからさ、ボクの事信じてくれるとうれし、
ぷやん！」

アイシャがリイムの頭を少々強い加減で
撫でまわすとスライム特有の柔らかさで頭が歪み、
可愛い声がある。

「ちよつ…と！、アイシャつ、
頭、ゆがむう、やめーてー!!!。」

「あたしがそんな事根に持つかよ、
それよりもそういうのが分かってきたっていう
方が嬉しいよ。」

今日をお願いね。」

「…うん、じゃあ始めるね。」

頭の形を戻してはにかむリイムは足元に
広がるスライムの一部を変形させる。

(…?。)

なんとなく既視感のある床にそそり立つそれに
これどうするのかな?と単純な興味を抱くアイシャに
リイムは当然の事のようにそれをどうするか教えてくれた。

「じゃあ、これをお〇んこに自分で突っ込んで。」

「…うん、わかつ…。」

んん!!!?。?

「んっっっ」

「そろそろ、アイシャがHだなと思う感じでね、
いいよアイシャ、とってもHだよ。」



「んっ、
リイムさ、今日は任せるって言ったけど…これには
どんな意味が？」

「ボクのテンションとかやる気が凄い上がるー!!」

「せんせ、この体勢辛いでやめていいですか？」

「あ、ごめんね、じゃあこういう感じでどう？」

正直この膣内をスライム棒で満たされている状態でも
アイシャの身体能力ならば体勢が苦という事は無い。
半分冗談で辛いと言ってみただけだが、
リイムは即座にアイシャを包む極薄のスライムを変化させ
アイシャの体をしっかりと支えてくれる。

「挿入してるのは少し振動してるけど。」

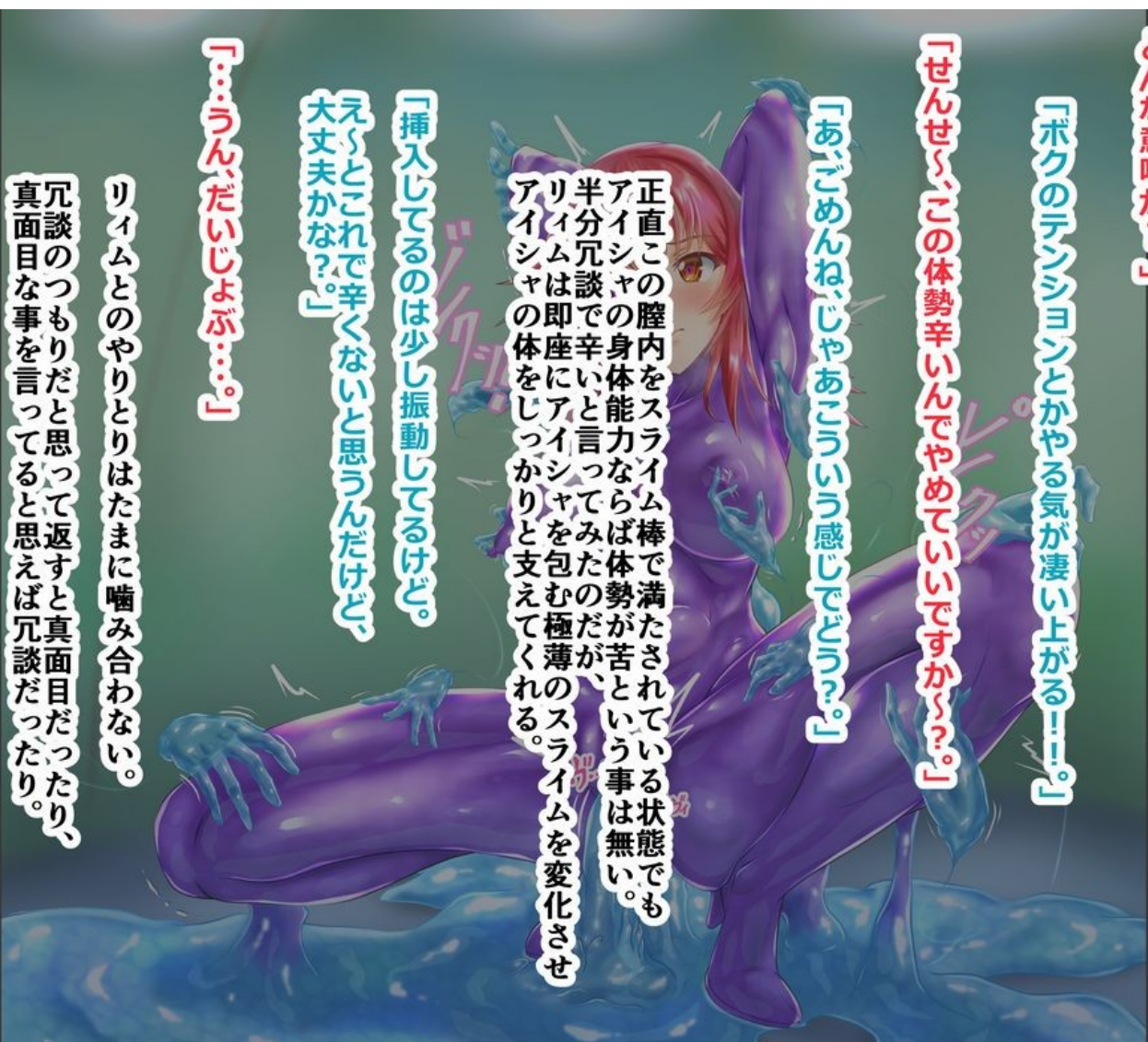
え、とこれで辛くないと思うんだけど、
大丈夫かな？」

「…うん、だいじよぶ…。」

リイムとのやりとりはたまに噛み合わない。

冗談のつもりだと思って返すと真面目だったり、
真面目な事を言ってると思えば冗談だったり。

特に今のような時にはどうにも
自分が大人げない事を言っているように思えて
アイシャはきまりの悪さから少し口ごもってしまう。



「そーい、これ凄いな。」

「ちよつとレントっぽいでしょ、切り離せてるわけじゃないけど。」

アイシャの下に広がるスライムから生み出され宙に浮くと手。実際それは極めて細いスライムで繋がっているのだが、まるで遠隔操作しているように見える。繊細なスライムの操作に感心するアイシャ。

「所で、今日までにいつもより敏感になつちやつた力所とかある。」

「ん、特にないかひゃんっ!。」

リイムのスライムハンドに内ももを軽く撫でられ、アイシャの口から可愛らしい声上がる。

「結構敏感になつてるじゃん。」

「じゃあこれからする事説明するよ。」



神経に絡まる淫気の根の除去手術。

その物理の枠を超える悪辣な代物は、世界一の技術を誇るヴァルブレオスでも処置不可能とされたのだが、唯一状況を打開できる人物がいた、それがリイムだった。

リイムはその出自が人造のマーゴだったのだが、紆余曲折の果てに通常のスライム型マーゴとは違う進化を遂げていた。

それはリイム自身が自分の事を知りたいと言い始め、それに主治医が協力した事で分かっていったことなのだが、

リイムは通常のエネルギー以外にマーゴの淫気も吸収する事が可能だった。

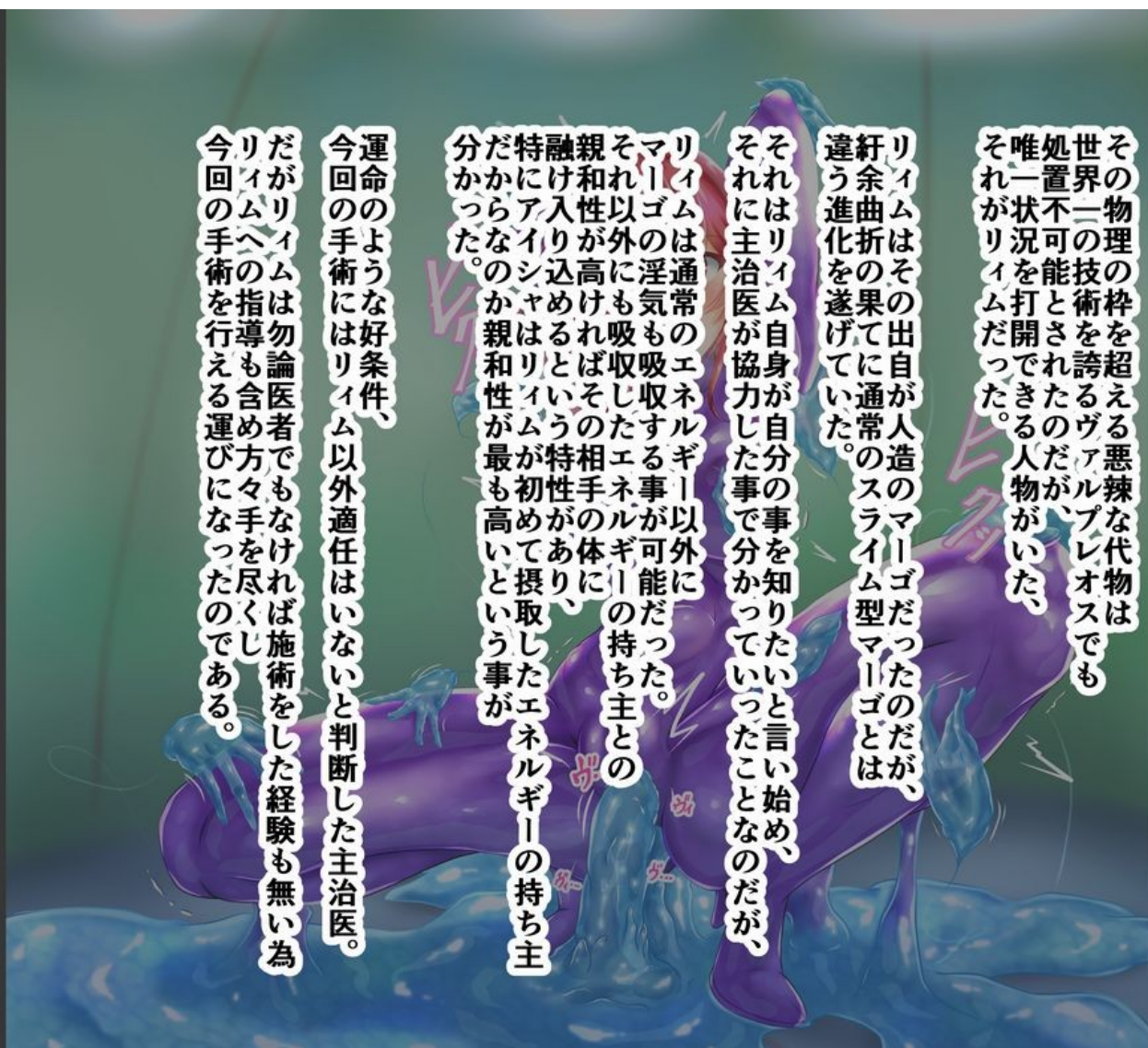
それ以外にも吸収したエネルギーの持ち主との親和性が高ければその相手の体に

融け入り込めるという特性があり、

特にアイシヤはリイムが初めて摂取したエネルギーの持ち主だからなのか親和性が最も高いという事が分かった。

運命のような好条件、今回の手術にはリイム以外適任はいないと判断した主治医。

だがリイムは勿論医者でもなければ施術をした経験も無い為リイムへの指導も含め方々手を尽くし、今回の手術を行える運びになったのである。



「今からアイシヤを気持ちよくしてイク時のドレインと一緒に淫気の根を僕が食べて取り除くから。」

アイシヤは「うん、じゃあイキそうになったら、イクって出来るだけHな感じで言つて。」

「んっ…え！？…やだ。」

「え、なんでさ、アイシヤが気持ちよくなつてる方が取りやすいんだよ。」

「あたしがイッた時なんてリイムだったらこのラバーで分かるでしょ？」

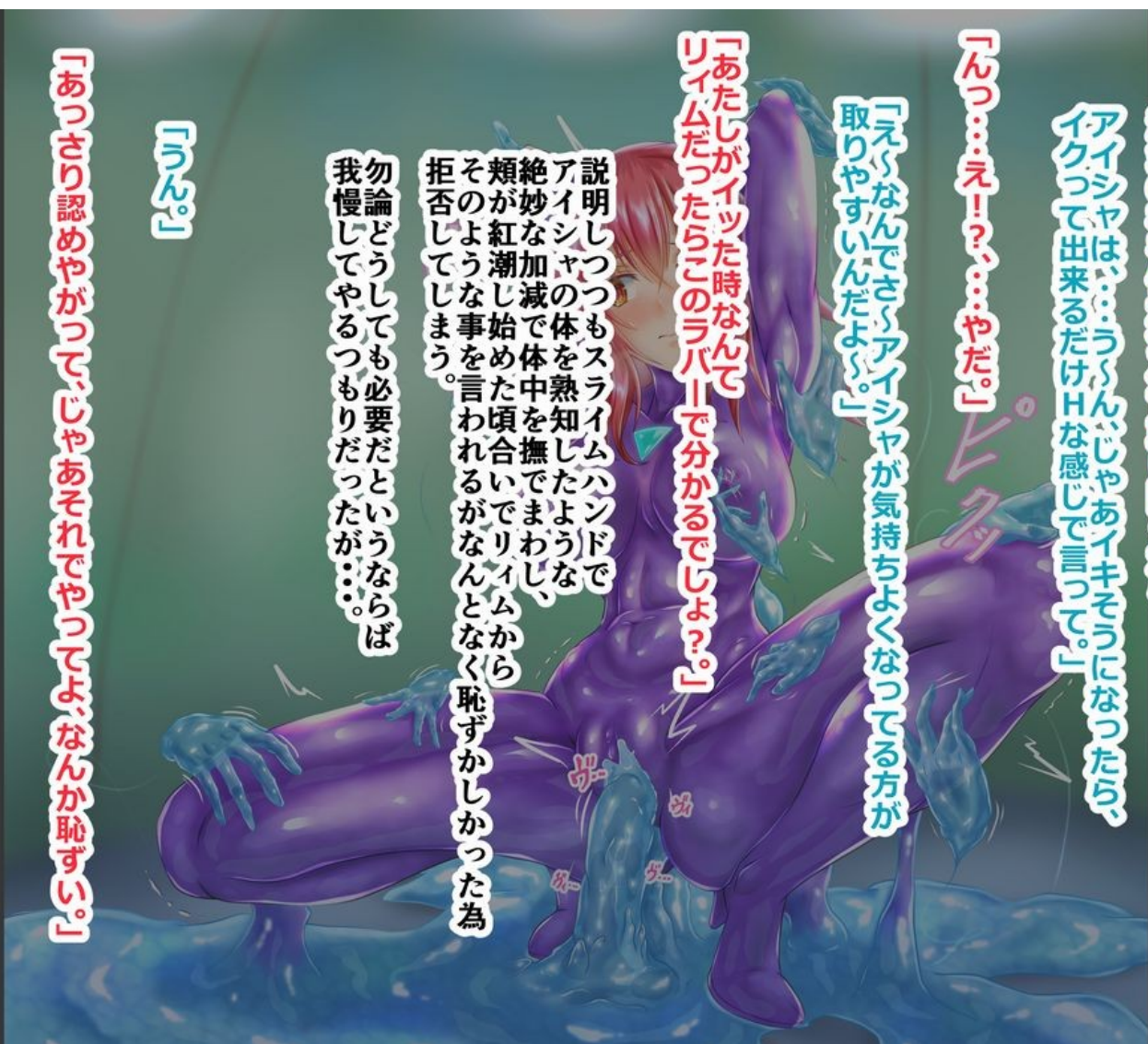
説明しつつもスライムハンドでアイシヤの体を熟知したような絶妙な加減で体中を撫でまわし、頬が紅潮し始めた頃合いでリイムからそのような事を言われるがなんとなく恥ずかしかった為拒否してしまう。

勿論どうしても必要だというならば我慢してやるつもりだったが…

「うん。」

「あっさり認めやがつて、じゃあそれでやってよ、なんか恥ずい。」

「もうそっちの方が盛り上がるのに、困った患者さんだな。じゃあこれ使おうかな。」



HP

EN

♥

o

o



「何これ...?」

アイシャの目の前に謎の画面が表示される。

「これはアイシャの体をモニターしている画面だよ。」

「えっ！？そんな事してんの！？。」

「だってこれって手術だし、患者の体をモニターするのは当たり前でしょ？。」

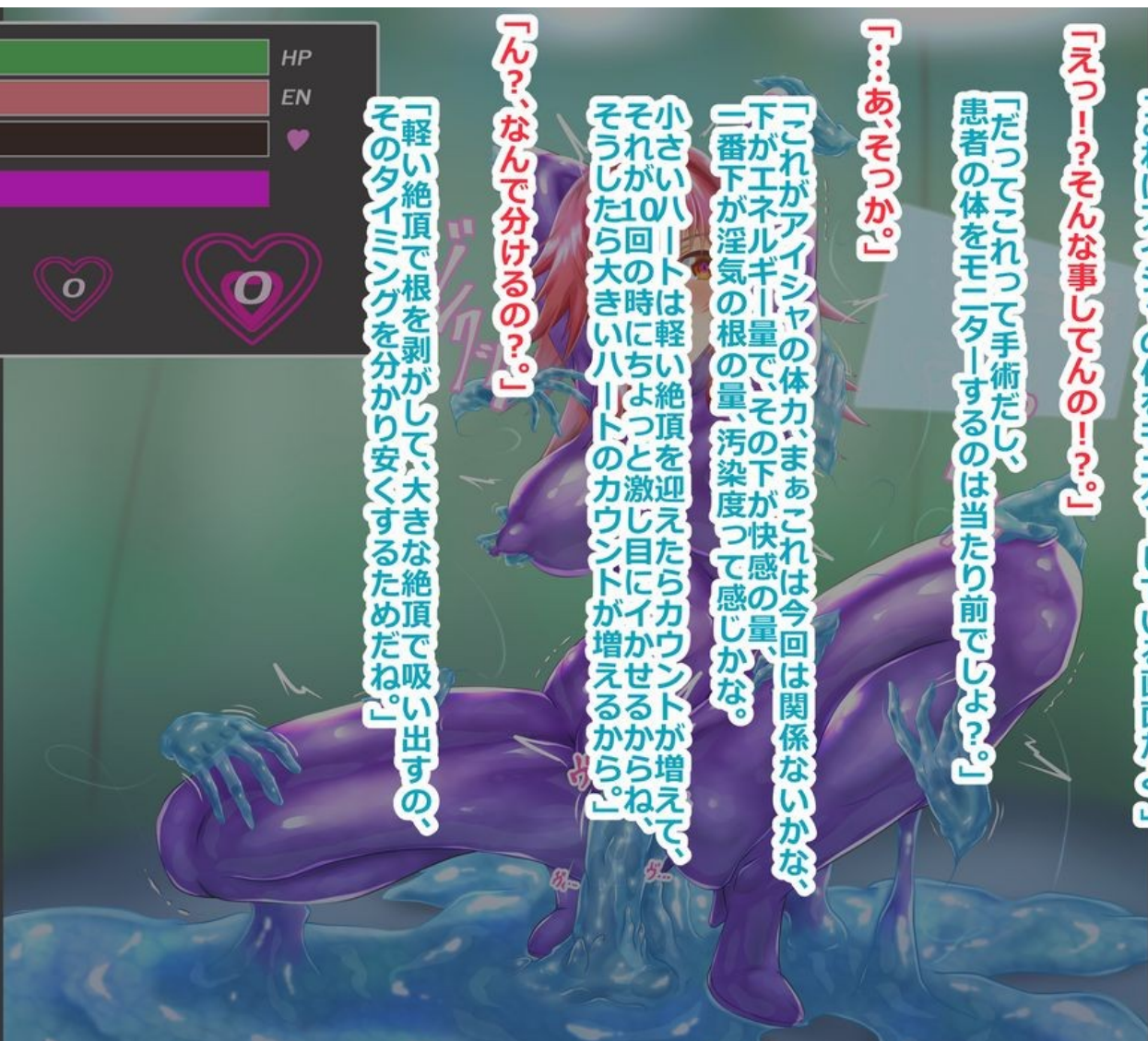
「…あ、そっか。」

「これがアイシャの体力、まあこれは今回は関係ないかな、下がエネルギー量で、その下が快感の量、一番下が淫気の根の量、汚染度って感じかな。」

「小さいハートは軽い絶頂を迎えたらカウントが増えて、それが10回の時にちよつと激し目にイカせるからね、そうしたら大きいハートのカウントが増えるから。」

「ん？、なんで分けるの？。」

「軽い絶頂で根を剥がして、大きな絶頂で吸い出すの、そのタイミングを分かり安くするためだね。」



「あとマーゴハンターってよくHな目に合うから普通の絶頂でもイッたと感じないくらい我慢強いらしいんだよね、アイシヤの体、結構敏感になってるけど、これで生活出来るんでしょ？普通はまともでいられない数値らしいよ、今のアイシヤ。だからそれを利用しようって事なんだよ。」

「でもでもリイム、これ、やめない？」

画面の事をテキパキと説明するリイム、ただ今のアイシヤは自分の体を探られているようで、なんともいえない気分になるので画面を消してもらえないかとお願いする。

「アイシヤ、今日はあつちで先生がモニターしてくれてるけど、何度もイカせるだろうからつてこの部屋にはボクじかないんだよ、頑張つてアイシヤを助けないから協力してね？」

「う……ごめん。」

まるで注射を怖がる子供を言い聞かせるようにアイシヤを窘めるリイム。流石にここまで言われてしまつてはアイシヤも覚悟を決める事にしたのだった。



「はっ、んっ…。」

「結構敏感になっちゃてるね…あれ？
もう軽くイッちゃった？」

「んふ…そんな、ことない…。」

「えーでも数字がね、ほら。」

「…。」

「アイシャはエッチな事に本当我慢強いけど
数字で出されると分かりやすく
面白いでしょ？」



HP

EN

♥



1

0

リスライムハンドの手管にアイシヤの口から甘い喘ぎが零れ、小さいハートの数字が7から8になる。

「腋をキュッて押すのと乳首を弾くの合わさると結構気持ちよくなっちゃうでしょ?。」

「んふ…んっ♡!。」
「あ、あたし、こんな簡単に…うう。」

「んふふ、自分が思ってるよりエッチな体って分かるの興奮しちゃう?。」

「そ、そんなっ、んああっ♡♡!。」

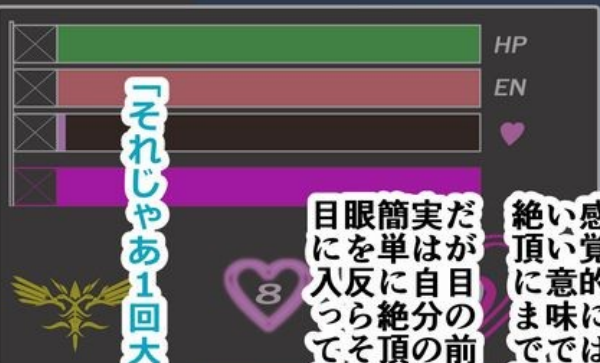
数字が9になる。

自分の体がリイムの言う通りの甘い痺れに襲われる、その甘い波は心地よく、感覚的には多少強い快感だが、いい意味では少ない慣れた感覚で、絶頂にまで至っていないかと思っていた。

だが目の前のモニターで数字が変わる所を見てしまうと、実は自分の体がいつもこの位の刺激で

簡単に絶頂しているのかと思うと、目を反らそうとしても数字の変化が気になり、目に入ってしまうと羞恥心で頬の紅潮が強くなる。

「それじゃあ1回大きくイカせるね。」



HP

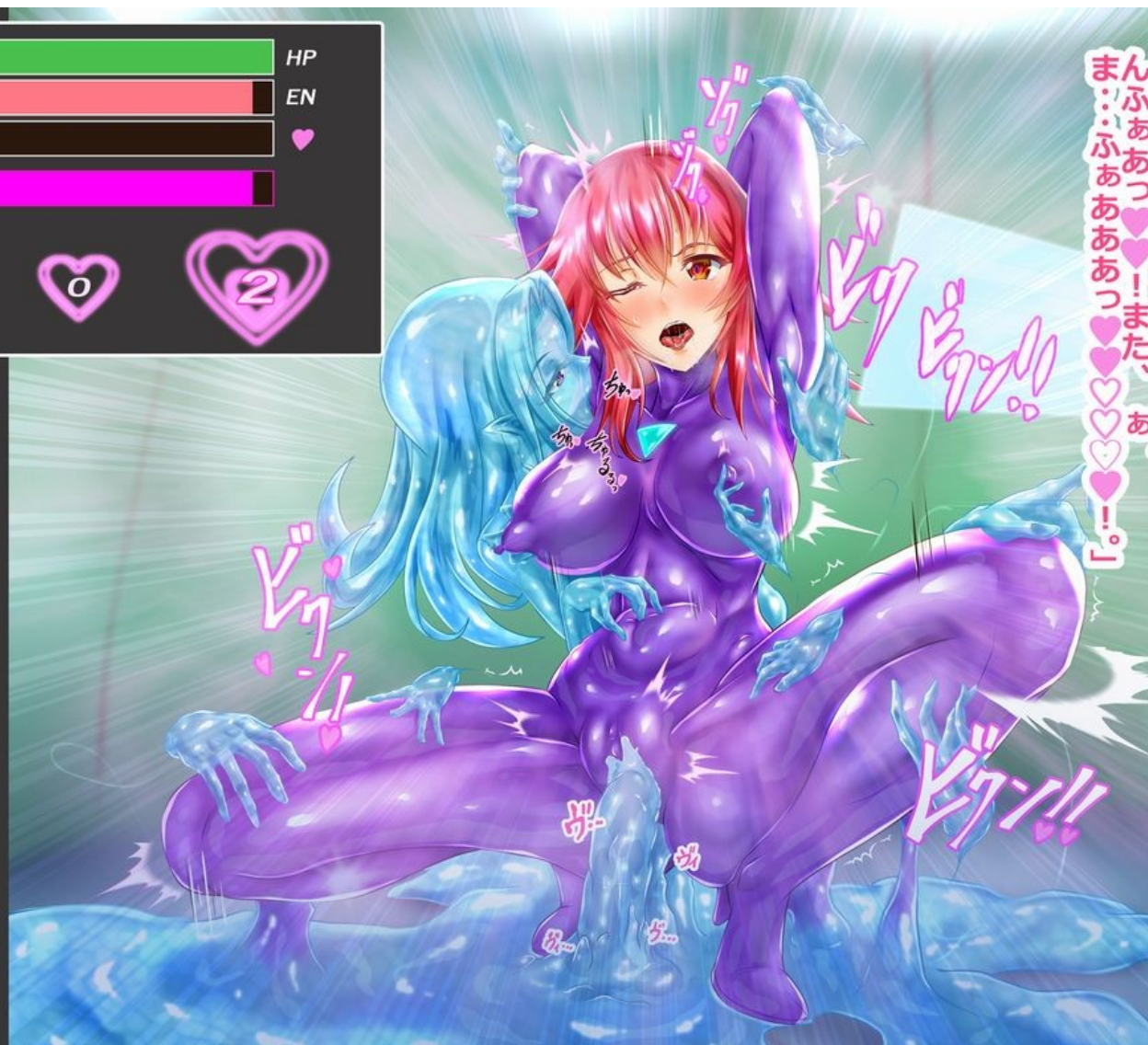
EN

♥



♥ 0

♥ 2



「やつ!?!、りいむ?、だつ!、
んふあつ♥!また、あ
ま...ふあああ♥♥♥♥♥!」

「やつぱりボクも参加したくなっちゃった。」

「ふやっ♡!、ダメっ、リイムっ、
そんな吸いつづけ、…っ、ああ、
んふああ♡♡♡♡!」

アイシヤの右腕に可愛らしい口づけをしたかと思えば頬張るように口を開け吸い付くリイム。

「こうやって吸い続けながら舐めたり突かれたりすると、
ビリビリきちゃうでしょ?」

「あひああ♡♡!、あう、りいむ…だめっ!、ええっ!」

スライムには口は存在しないし、呼吸も厳密には必要としない、
なので息継ぎ無しで吸い付き続ける事が出来るし、
そのままで喋る事も出来る。

アイシヤが好む絶妙な吸い加減を保ちつつ、口内では
感じるポイントを的確に舐め上げたり突つくとアイシヤの体が
ビクビクと跳ね、小さいハートのカウントが上昇する。



「んっ…んっ…うあ…んあぁ…んっ…」

「アイシヤの膣内はボクのが子宮の入り口まで
コネコネしてるでしょ、
それに合わせておへソを震わせるとお腹の中で合わさって
気持ちいいでしょ？ さっさとこっすするとね…」



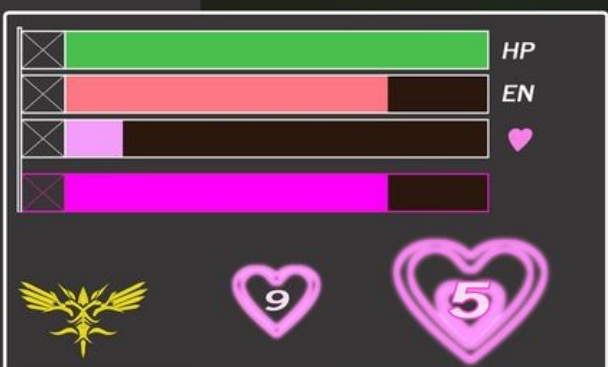
膣内にミツチリと詰まったスライム
は軽く振動をじ続けていたのだが
その実アイシヤの弱い部分を
極めて的確に執拗に蕩かしており、
それが外側の刺激と絡み合う事で
アイシヤの体は敏感な子宮から
いともたやすく筆絡されてしまう。

「とんっ」

「んっ…んっ…んっ…」

リイムの中指以外の指が
アイシヤのお腹を軽く叩く、

音も殆どしないような軽い衝撃だが
11回だけのそれで
アイシヤの腰がビクンっ！と跳ねる、



「とんとん、とーん。」

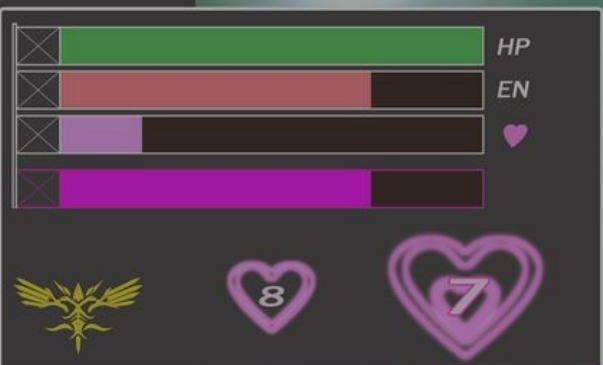
「んひうつ♡♡♡あぁっ♡♡♡んつくぁあ♡♡♡あっ♡♡♡！」

更に4本の指でアイシヤのおへソ周辺を叩くと
アイシヤの口から甘い音色が響き、
数字のカウントの上昇が止まらなくなる。

「おひにもうっひいっ。」

「ふぁあぁっ♡♡♡そいつ♡♡♡んふぁっ♡♡♡！」

スライムハンドの二つが
アイシヤのクリトリスに狙いを定めた、
指先でゆっくり撫でたり下側から
カリカリと弾いたり掻いたりすると
とろとろと煮込む様な快感に
ピリッとしたスパイスのような
刺激が加わり
ハートのカウントが加速度的に上がる。



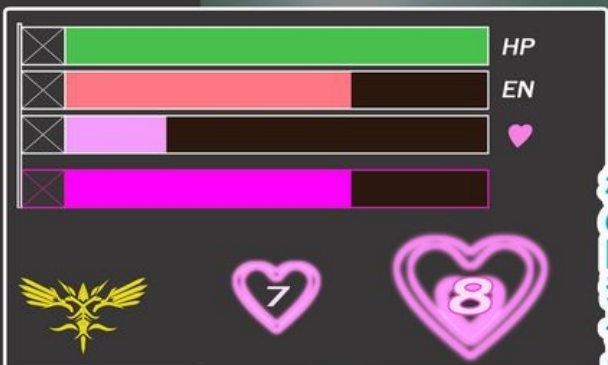
（すっかり舌が出てきちゃって、嫌がつてたのにイクイクって言っちゃってるし、ふふ、かわいい。）
でもこれ言うのと舌引っ込めちゃうだろうから黙っておこー。

アイシヤの反応に満足気なリイム。
重要なのは根の除去でそこに手を一切抜いていないが
アイシヤが快感に翻弄される姿はやっばりいいと思うのだ。

（よし……よし……、
うん、すごい順調♪、
……こうなった時は……、あっ！、そうだった。）

「アイシャ、これから沢山イカせるけど根の除去、すごい順調だよ、だから頑張つて！」

患者を不安にさせる言動はしてはならない、
だが順調な時は順調だと教えて
安心させる事が大事、
そう教えられたリイムは
アイシヤに一声かけると
更にアイシヤの体に快感を与えていく。





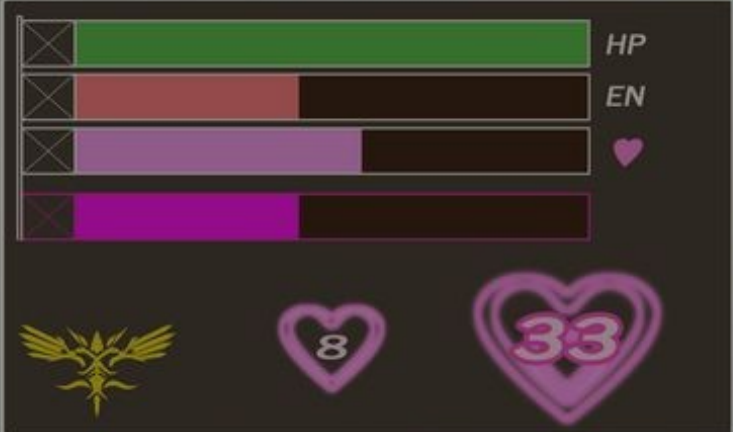
「ん……ん……ふ……」

体の中を深く満たしたスライムの全てが蠢き始めると、一旦収まっていた快楽の熱が再び湧き上がってくる、

だがその熱は先程までのピリツとした刺激とは異なり、大きなお風呂で手足を伸ばした状態でリラックスした時に感じるゆつたりとした心地よさがあり、自然と目を閉じると体の表面を触れるスライムの感覚や耳の中を満たすスライムがくちゅりクチュリが蠢く音が心地よく響く。

「んん……ふむう……いいな、きもち……いい……」

アイシャの腰がビクつと跳ねる、緩やかな快楽は大きくも温かい絶頂をアイシャに与えるが、弾けるような刺激ではない為かアイシャは軽く体を震わせ目を閉じ甘い呻きを上げ感じ入る。



「お疲れ様アイシヤ、ぜくぶんぶ取れたよ!」

アイシヤの状態をモニターする画面には
エネルギーの量と汚染度を現すゲージが0になっていた、

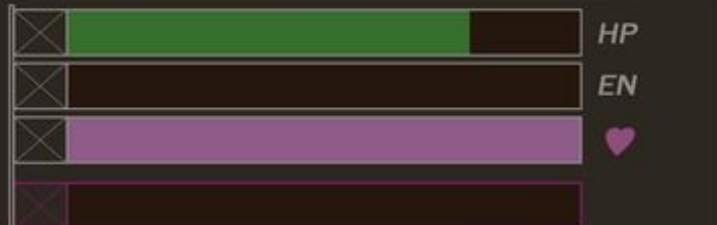
「はへ♡…♡…♡…♡」

リイムに手術の成功を報告されても、蕩けに蕩けきった体と頭では
返答など出来ようはずもなかった。

その後も中々アイシヤの絶頂が止まらず、止めようと
リイムが優しく触れたり頭を撫でるだけの後戯でもイッてしまい、
少し慌てたのだが、なんとか大きいハートの数字が
150に至る前に止まった。

ようやく落ち着いた所でリイムはアイシヤを主治医に
受け渡し、最初の時よりも詳しい検査を受け、
結果アイシヤの体内に絡みつ়く淫気の根は全て除去されていた。

当初は流石に欠片くらいは少し残ってしまっだろうと予測されていたが、
シュミレーションでさえ一度たりとも失敗しなかった
リイムに取りこぼしなどあり得る筈も無く、
欠片すら残さない100%を超えるその仕事ぶりには
主治医も舌を巻いた程だったという。



「ねえアイシャ、最後凄い積極的だったけど、そんなに気持ちよかった？」

「んー、まあね…、？ あ。」

「どういう感じですか?!、ねえねえ今後の為に聞きたいな、ねえ、ね。」

ロビーで2人並んで座っている所で、リイムから先程の事を聞かれ、エネルギが空に近い状態でかつ直近の大問題が解決した安堵感からアイシャはぼーっとしていたままに答えてしまい、しまったと思った時にはすでに遅く、目を輝かせたリイムが詰め寄ってくる。

「あーっ!、なんか空っぽになるまで搾り取られたからお腹すいたなー!、今日はリイムが奢ってーっ!。」

「えっ!?、ほんとに!、ボク友達にご飯奢るのやってみたかったんだよ、やったー!、どこいくどこ行くー!。」

実際搾り取られたおかげで大分お腹が減っていたので、それを理由に無理矢理会話を終わらせようとしたのだが、何故かそれはリイムにとって喜ばしい事だったようで…。

リイムとはたまに噛み合わない。

「リイム、今日はありがとね、あんたがいてくれて助かったよ。」

だけど友達なのだからこの言葉くらいはきくと噛み合うはずだが…。

もし噛み合わなくても面白いしね。と自然と頬が綻んでもうアイシャだった。